巻頭言
山岳トイレと管理

大雪山十勝連峰に美瑛富士避難小屋があります。標高 1630m 高山植物の花が咲きハイ松やスゲ類がゆれる草原のなかに、プレハブの避難小屋が据えられて太いワイヤーロープで固定されています。避難小屋から登山道を挟んで野営指定地があります。背景は岩が重なるガレ場となり、野生動物の走り回る様が見られたり、天気の良いときには昼寝をしたりする別天地です。ここに宿泊や休憩で利用する避難小屋とキャンプ場はありますが、残念なことにトイレがありません。休憩する登山者は、用を足す場所探しが大変で、あとに汚いブツを残していくのですから、何とかならないものだろうかと誰しも思っていました。そこでトイレを設置するための「美瑛富士避難小屋にトイレ設置を求める連絡会」として、広く道内の山岳会や個人、団体に協力を呼びかけ０５年８月美瑛富士避難小屋トイレ設置要望署名活動は始まりました。３ヶ月で２万筆が署名され、冬季のいまも署名が届いています。

署名活動が始まってまもなく、連絡会に参加する団体から「どんなトイレを希望するのか」と問われました。“バイオトイレを良し”とする一般登山者の反応と違う状況を「山のトイレを考える会事務局」は抱えています。バイオとは菌が活性化する温度を保ち糞尿を分解できるものを指します。菌の活性化に大切な条件は、温度を保つための電気の供給です。電気供給が不十分のまま利用し続ければ、使用不能に陥ることも予想されます。故障しない一つの案として、バイオ以前の遺物にされたかのような貯留式トイレがあります。数年毎にヘリで運ぶ計画を組み込んだ上で導入できないものでしょうか。更に別のタイプに固液分離方式もあります。この度の第７回フォーラムで聞く「全国の事例報告」を参考に、その後学習会やミーティングを重ね「美瑛富士に似合うトイレ」を提案したいと考えています。

美瑛富士避難小屋は 1995 年倒壊し翌 1996 年建替えられました。それより以前から小屋の修繕や清掃をしてきた地元「美瑛山岳会」に感謝申し上げます。大雪山に限らず道内各地の山岳会はそれぞれの地域にある山を関連機関と守ってきました。山岳会の高齢化を迎え、小屋の修繕や清掃に困難をきたすことが推測されます。これからの管理を誰がどう担うのか、トイレ問題をキーワードに考えてきました。

ここで山岳環境全体の利用と保全に視点を据えて、避難小屋とトイレの維持管理をみると、地元と連携する支庁を超えたボランティアの参画を促す手法の検討や、トイレや避難小屋の維持管理費用について入山料や協力金の導入が妥当か、その検討も必要になります。何より山岳環境を総合的に検討し迅速に対応する実行機関を準備できないものでしょうか。

トイレ問題は関係機関のご協力によって、改良されてきました。これからも登山者と山岳関連機関が連携を保ちながら、管理のありかたを考えていきたいものです。

山のトイレを考える会代表；横須賀　邦子